

# 集団の中で、楽しみながら活動する子

小 谷 重 之

## はじめに

A男は、集団での話し合い場面に、離脱することなく着席して参加している。但し、他の生徒と同じ空間を共有しているだけといった印象を受けることが多く、自ら発言する場面は少ない。促せばなんとか自分の思いを発言することはできる。また、小学校5年生までに学習する漢字が含まれている文章であれば読む力があり、簡単な内容の日記を書く力もある。しかもその文章に自分の気持ちがにじんでいるのも大きな特徴である。

精神発達遅滞と自閉的傾向を併せ持つA男の、以上のような個性を生かしながら、A男の生活を少しでも他の生徒や学級集団と関わらせることができないものか。こうした問題意識をもち、A男の指導に取り組んだ2年間の経過について述べてみたい。

## 1 プロフィール

### (1) 生 育 歴

- ・昭和55年9月18日生 14歳4か月 男子（1人っ子）
- ・出生体重3900g ・首のすわり3か月半 ・歩き始め1歳
- ・歳までに発熱で数回小児科医へ通院
- ・K小学校（心身障害児学級）に6年間通学
- ・平成5年4月 本校入学（中学部1年）
- ・入学時 身長：163.5cm 体重：66.8kg（肥満度+25）
- ・中2 12月 身長：170.0cm 体重：69.4kg（肥満度+17）



楽しそうに作業をするA男

### (2) 諸検査による実態

○知能検査 IQ54 (VIQ47以下 PIQ72) WISC-R ……平成5年6月

言語性IQより動作性IQが優位なA男については、聴覚的手段より視覚的手段の方がコミュニケーション手段としては受け入れやすいのではないかと推測される。

○S-M社会生活能力検査 SA6:3……平成5年5月

身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
7:0	6:6	7:4	6:8	5:5	5:8
SA6:8……平成6年6月					
身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
7:8	6:6	8:0	6:8	5:5	6:10

際立った変化は自己統制の領域である。(3)行動特性でも述べるが、昨年あった自分の周囲の友だち

への攻撃的な行動はあまりみられない。但し、コミュニケーションと直接関係すると考えられる意志交換・集団参加の領域については変化が見られない。

#### ○コミュニケーション・サンプルの分析

(平成5年5月)……A男の会話を分析すると、会話の対象が教師を含めた周囲の大人に限定されることが多い。その内容もテレビで発信される言葉・台詞・CM・効果音のコピーが多く、機能面では「その他」に分類される。

(平成6年5月)……この段階のサンプルでは、注意喚起や情報提供が増えている。注意喚起や情報提供は、会話の相手があってはじめて表出される言葉である。昨年サンプル時より、観察者の違いという点はあるが、会話の対象が広がったと判断できるのではないか。少なくとも何かを誰かに伝えたいという気持ちがふくらんだと考えられる。

#### (3) コミュニケーションの特性

- ・選択肢を準備すると、自分の思いにより近いものを選択することはできるが、そうでない場合はオウム返し会話になることが多い。(平成5年) ⇨⇨現在も続いている。
- ・自分の意にかなわない場合、周辺にある物を床に投げつけたり、周辺にいる友人を叩いたりするといったパニックを起こす。同時に自分の頭を叩いたり、指の関節を咬んだりする自傷行為を起こす場合もある。(平成5年) ⇨⇨校内でのパニックはおさまった。但し、ストレスがたまると自傷行為(指の関節を噛む・机を叩く・自分の頭を拳で叩く)へ至る。
- ・学校生活の中で、作業に関わる活動では、昨年と現在までの経験をもとに、自分で作業内容を選択したり、自分なりの見通しで活動したりすることができることもある。つまり、1度経験すれば、次時には自分の力として生かす柔軟さはある。

## 2 取り組みの構想

### (1) 指導仮説

仮説 昨年度よりは友だちを意識している。特にA男と同じ個性をもつN男の存在が、A男の刺激になっている。N男は学級の誰にも同じような接し方をするのだが、それにもっとも反応したのがA男である。また、A男の個性を感じとり、盛んに関わろうとするL男の存在もある。そこで、これらの生徒との関わりを突破口に、友だちとの関わりを意図的に設定することによってA男の意識が集団へと拡がるのではないかと考えた。



受け答えに詰まり、困惑するA男



めざすコミュニケーション像：場や相手を意識して適切に応答する子



つきたい力 \* 友だちと一緒にの活動を楽しもうとする意欲  
\* 友だちとのやりとりを可能にする技能

## (2) 指導の手立て

自分なりの見通しがもてたり、おもしろさを感じたりした活動には、集中して参加する現在の力をいかして、A男の活動を他の生徒との関わりへ広げたい。特にコミュニケーション能力を高める指導については、①受容②表出③意欲の三つの視点からアプローチする。

- ① 受容……視覚的手段を通しての指示を心がける。動作を繰り返すことで感覚的に体得させる。
- ② 表出……選択肢の準備を心がける。思い（内なる表現）を文字化する取り組みも継続する。
- ③ 意欲……興味や関心を示すときの眼差しや顔付きや仕草を見逃さないように観察する。

また、実践の場としては、次の2つに整理することができる。

- ① 生活単元学習……各単元ごとに生活経験を拡大する。生活単元学習の場でも、友だちと関わる喜びや楽しさを感じさせる。
- ② 日常生活の指導……学級の仲間づくりの重要な時間ととらえる。受け答えのトレーニングの場面である。さらに、友だちの長所をみつけさせる場面でもある。

## 3 指導の実際

### (1) 生活単元学習での実践

昨年とはとにかく入学前の生活経験が乏しく、それをどう広げるか。また、特定の大人との関わりを好むことが多いA男を、少しでも友だちと関わらせることに力をいれてきた。しかし、本年はA男の行動特性にも挙げたように、前回の経験を次の場面で使うことができる柔軟性をいかしながら、友だちとの関わりを楽しさを感じるようになればと願いながら実践を行った。

生活単元学習ではコミュニケーションの拡がりを求めて、学級集団・学部集団・学部縦割り集団という様々な集団を経験することができる。また、その学習内容も多様である。生活単元学習を通してA男が友だちをどう意識するようになったのか、その様子を記す。

#### L男との関わりを通して

##### ○キャンプでの様子

教師のねらいは、自分たちで企画し、自分たちの力で運営するキャンプであれば、A男も友だちとの関わりを必要とする場面ができるということにあった。（キャンプの実践は、79頁を参照）しかしA男が友だちを意識し、友だちとの関わりや活動をもっとも楽しんだのは、学校とキャンプ場との徒歩による往復であった。学校からキャンプ地までは約4kmの距離がある。ひ弱なL男も1時間あまりの移動に挑戦する。これまでL男との関わりが少なかったA男に、敢えてペアを組ませた。L男は、徒歩で校外学習のたびに集団から遅れることの多かった生徒である。L男の個性を許容している生徒

であっても、L男の座り込みやふざけた態度に腹を立てるのが普通である。しかし、A男は中学部2年の集団に遅れてはならないと決意してか、しっかりL男の手を握っていた。そして時には、L男が集団から遅れようとするのをすばやく感じて手をグイグイ引っぱっていった。そして、A男はいつしか自分の歩くペースにL男を引き込み、L男もスタスタと歩くようになっていた。「L君、座ってはだめだー」「座ったら、いけんー」時折こんな声を聞きながらキャンプ地に着いた。



L男と手をつないで歩くA男

### ○運動会準備と大山宿泊学習での様子

2学期は学部縦割り集団での学習が中心になる。A男はL男・M男と同じ班である。班長I男と副班長M男を中心に学習が展開された。A男に、始業のチャイムがなっても入室していないL男を誘わせるようにした。「L君、ブランコからおりなさい!」「L君、教室へ入りなさい!」と叫ぶA男。無視してブランコを続けるL男。A男は両手でブランコを止めるので、L男は仕方なく教室へ入ることになる。このような繰り返しで、L男とA男は関わらざるを得ない状況が生まれた。

大山宿泊学習では、厳しい山道を一緒に登り下りしたり、宿舎でともに活動したりした。第2日のトム・ソーヤ牧場では、L男とA男と一緒に餌をやるうとしたり、放し飼いにしている動物へ近づこうとするL男を、A男が無理やり止めようとしたりすることがあった。

そんな関係ができたためか、L男がもっとも甘える生徒はA男である。A男も口では「やめてください!」と拒否のサインを出すのが、A男が真剣な態度ではないので、L男の心には響いていない。

### (2) 日常生活の指導

日常生活の指導は、学校生活のあらゆる場面にわたり、その内容も多様である。しかし、繰り返しの指導によってコミュニケーションの拡がり期待されるA男を、意図的に学級の友だちと関わらせることができる大切な場面である。

#### ①あらゆる場面でのN男との関わりを通して

友だちとの関わりを意識し始めたA男を変えるきっかけになったのが、N男の存在である。A男と同じ個性をもつN男は、誰に対しても自分の思いを話したり、疑問を投げかけたりする生徒である。従って、N男が特にA男を意識して関わりを持とうとしたのではないが、A男の側に立てば、他の友だちと比べるとN男からの働きかけが圧倒的に多いと言える。

#### 口うるさいN男⇒⇒⇒⇒気になるN男

N男：A君、早く係の仕事をしてください。→→→→→	A男：はい。
A君、自分の仕事はあとにしてください。→→→→	はい。
N男：A君、何故日記を書かなかったんですか。→→→→	(促されて) 疲れていました。
A君、日記を書いてきてください。→→→→→	はい。

毎日がこの調子である。N男は自分なりの価値観や見通しによって友だちの行動を評価し、それを

言葉で表す。このような働きかけをしてくるN男に対してA男は、N男の失敗を大声でしゃべること  
でN男に対抗するようになった。教師がN男に注意を与えると、すかさず「N君の悪かったことは」  
とうれしそうに話すようになった。とにかくN男が気になっていった。

**気になるN男⇒⇒⇒N男の良さをみつけよう**

他人の欠点は見つけやすい！……これを逆に考えると、他人の良さを見つけさせてはどうか。そこ  
で「帰りの会」で「友だちのよかったこと」をみつけ発表させる取り組みを始めた。それまではN男  
の反省のたびに「N君の悪かったことは……」とN男が忘れていた失敗であっても必ずつぶやいてい  
たA男である。N男に限らず友だちのよかったことを長時間思い出していたり、教師に促されてなん  
とか発表したりしていた。時には、他の生徒が発表した内容を繰り返すこともあった。「N君の良か  
ったことは」ここで言葉に詰まってしまうことが多かったA男も、徐々にこの取り組みにも慣れ苦勞  
しながらもなんとか発表するようになった。また、慣れるにしたがって、N男の良かったことのみな  
らず、他の生徒の良かったことも発表するようになっていった。

**② 朝の会でのゲームを通して**

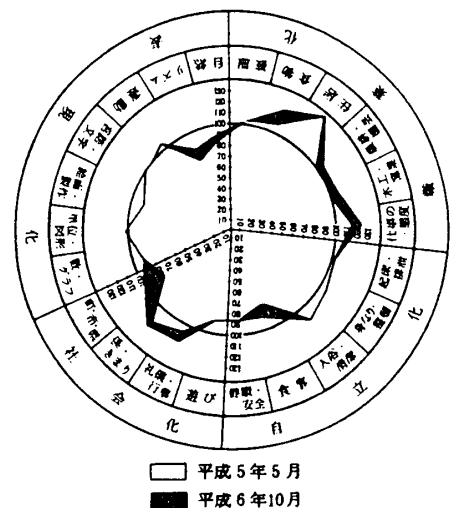
コミュニケーションの拡がりを意識したのは「帰りの会」だけではなく「朝の会」も同じである。  
特に、今年度は「日直の出し物」という取り組みを行った。ここでは、ものまね・ふりまね・なぞな  
ぞ・クイズ・しりとりといった出し物を日直の生徒が行う。この出し物の中に、「友だちと大声を競  
うゲーム」と「友だちと長い息を競うゲーム」を取り入れた。「友だちと何かを競うこと」と「発声  
の基礎を鍛えること」をねらいとしていた。日直の生徒は競争相手を指名する。さらにどちらが優勢  
かを判断する審判役の生徒を指名する。審判役の生徒の進行によってゲームが展開し、審判の判断に  
よってゲームが終わる。日直は少なくとも2名の生徒を指名しなければならない。A男はN男以外に  
誰かを指名しなければならず、この取り組みの繰り返しも、  
A男の意識を友だちへ拡げる効果的な指導であったように思う。

**4 考察と今後の課題**

行動特性にも述べているように、校内でのパニックが落ち着  
いてきたのは、指導の成果と考えられる。これはS-M社会生  
活能力検査の結果からも明らかである。コミュニケーションの  
拡がりに視点をあてると、他者を意識し何かを誰かに伝えよう  
とする気持ちが育ってきていると考えられる。

右の図は、A男の段階別教育内容表Ⅳ段階到達度を表してい  
る。A男の入学時と現在を比較すると、特に社会化・職業化の領域で拡がりをみせている。コミュニ  
ケーションを意識した指導も、この拡がりにつながっていると考えられる。

しかし、学級の中では少しずつ友だちを意識し、友だちとの活動を楽しみ始めたA男であるが、こ  
れを学部全体へ拡げることと、これからも場面設定を続けることが課題である。



段階別教育内容表Ⅳ段階到達度評価(A男)